

の徳を願わせるであろう。ヒーヴェスはとくに、聖人や教父の伝記を推賞している。<sup>27)</sup>

女性たちが神学的、哲学的知識を深めたり、また、修辞学や「法学」、論理学を学ぶことはなおさら必要としない。それらはモンテーニュが言うように、「彼女等には必要のない非常に空しく、不用な薬である。」<sup>28)</sup>

こうした女性訓育は、娘たちを若者の軽薄な話に耳を傾けることから逸らせる。ヒーヴェスによれば、「読書に養われた知恵を持つ心は、奢侈を嫌悪するだけでなく、ダンスや歌やふしだらな遊びのような、生娘の精神を損なう多くの小さな、軽い快樂の思いを拒絶するだろう。」<sup>29)</sup> そのうえ、読書は暇や「良俗を腐敗させるもの」に対する最良の薬なのである。この点に関しては、とくに、エラスムスが強調している。

エラスムスにはもう一つの主題がある。すなわち、夫は妻の「家庭教師」という主題である。「もしも彼女たちに学識がないならば、夫に教えられなければならない。」とヒーヴェスも言うが、エラスムスはこの考えをさらに詳細に展開するだろう。彼にとって問題は、良い結婚の秘訣を与えることである。「ところで、妻の気持というものは、結婚の結びつきを養うのに大いに貢献するから、夫が彼女の行為をよく教育することは肝要である。…彼女は夫が望むような妻となる。それゆえ、結婚前に、性質がおとなしく扱いやすい女性を選ばなければならないし、同様に、結婚後、夫が持たなければならない第一の、基本的な配慮は、妻の心を育て、福音書の教訓を教え、少しずつ、敬虔さと徳を愛するように導くことである。」<sup>30)</sup>

プロテスタントも妻に対する夫の義務を同様に考えるだろう。夫は彼女を教育し、良俗と真の宗教に導くだろう。道徳的、宗教的な教育を別にして、エラスムスも文学的指導でもあり、精神と判

断力の養成でもある知的教育を予見している。夫は妻にラテン語とギリシャ語を教え、良い読書をするように彼女を教え、妻が説教を理解し、心にとめ、「物事を正しく判断する」ように導く。<sup>31)</sup> 夫によるこの訓育は必須である。「夫の健全な協力なくしては、妻は何一つ完全なことはできないので、また、もしも夫が妻の精神を育てることを、また、妻に健全な感情を吹き込まなかったら、何が期待できようか。」<sup>32)</sup>

ヒーヴェスに関して、エヴリーネ・ペリオールヴァドールは次のように書いている。「男性の介入は決定的である。」「要するに、腐敗のあらゆる危険を避けるためには、男性は女性と知識の間の仲介者として現れる。」<sup>33)</sup> 女性は自分自身で何かを知ることができるか買いかぶることができないし、自立的に教えられることもできない。そのうえ、女性は黙らなければならない。聖パウロは教会内では語らないよう女性に禁じたではないか。「彼は彼女たちに集会で話すことを許可しなかった。しかしながら、家で学ぶために話すことは妨げなかった。しかし、夫の上に立つことは全く許さなかった。」とはいえ、もしも夫が教える務めを心に留めているならば、起こってくることには、何の危険もない。というのは、花婿と花嫁の間に立てられるのは、教師と生徒の関係であるので、一方の優位性と他方の従属を強調するだけでなく、夫は妻が喜んで従うことを教えるからであり、夫の訓育の果実は敬虔さ、羞恥心、謙虚、また、服従と愛など多様だからである。

もしも、エミール・V. テルとともに、エラスムスにおいては、結婚愛がある程度、女性愛をひき起こすことができるというならば、(エラスムスは花嫁に尊敬、思慮、訓育を求めている。) 昔のフェミニズムより進歩しているという意味ではない。<sup>34)</sup> フェミニズムについて語らなければならないとしたら、それは「父権的フェミニズム」であ

27) VIVES, *Femme chrestienne*, p. 36.

28) MONTAIGNE, *Essais*, III. iii. p. 822.

29) VIVES, *op. cit.* p. 38.

30) ERASME, *Mariage chrétien*, p. 234.

31) *Ibid.*, p. 235 et p. 237.

32) *Ibid.*, p. 237.

33) BERRIOT-SALVADORE (E), *La Femme en France*, p. 68.

34) TELLE (E.V.), *Déclamation des louenges de mariage*, p. 204.